SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

学校体育における運動経験の適切性に関する研究：学習指導要領に対する適正な評価に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野津, 一浩, 新保, 淳, 村田, 真一, 山﨑, 朱音 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025379

学校体育における運動経験の適切性に関する研究

－学習指導要領に対する適正な評価に向けて－

A study on the suitability of exercise experience in physical education as a school subject

- Towards the fair evaluation on an education guideline -

野津一浩　新保淳　村田真一　山﨑朱音

Kazuhiro NOZU, Atsushi SIMBO , Shinichi MURATA and Akane YAMAZAKI

（平成29年10月2日受理）

Abstract

In this paper, the kinds of events experienced during the school days were confirmed, and the favorite and disliked events and their reasons were examined respectively to organize the objectives of the current education guideline of health and physical educations as school subjects from the viewpoint of the goal structure.

As a result, the actual states of the experience of each event and the awareness of the likes and dislikes against the event and the reasons thereof were grasped.

Trough inquiring the background of such awareness, however, we realized that what kinds of sense of values the children obtained about working on exercise, and how they establish the relationship with exercise should be examined.

Such an examination will make the details of an education guideline be correctly evaluated eventually. As the result of it, it is thought to be necessary to discuss how the guideline influenced the problem-solving for such as the bipolarization of children who exercise and who do not, improvement in physical strength, etc.

In this respect, in transferring to the next version of education guideline of health and physical educations, the necessity of re-realizing the role of physical education as a school subject that takes a part of responsibility to solve problems, and evaluating whether it plays its role sufficiently or not is considered, while taking the issues like the bipolarization of children who exercise and who do not, improvement in physical strength, etc.

１．はじめに

おおよそ10年ごとに学習指導要領の改訂が実施されている。小学校においては平成32年度，中学校においては平成33年度の全面実施に向けて平成29年３月に文部科学省から次期学習指導要領が公示された。このように，これまでも学習指導要領の改訂が実施されてきたわけであるが，いつの時代においても話題として取り上げられるのは，「何がどのように変わるのか」ということに終始しているような印象がある。子どもたちの現状や課題に対して学習指導要領に基づいた教科指導で何が実現されたのか，またどのような効果をあげたのか，ということがあまり取り沙汰されないまま次の学習指導要領の内容に移行し，新しい教科指導のあり方を追究していこうとするような風潮があることは否めない。このような現状に対して，学習指導要領そのものに対する評価がどれくらいされているのかという疑問を持たなくてはならないであろう。

しかしながら，国語や数学等の教科においては，教科指導を通して教科内容をどれだけ身に付けさせることができたのかということは，学力テストの結果との関連が深いと考えられる。そのため，学力テストの結果は学習指導要領にもとづく教科指導の成果を表しているものと捉えることができ，すなわち学習指導要領の内容を評価していることとなると考えられる。

それに対して，体育科･保健体育科においては，「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現」を目指しており，そのための基礎基本を培っていくものとして教科内容が位置づけられている。このことからすれば，体育科・保健体育科の学習指導要領にもとづく教科指導の評価をしていくということは，各種目において基礎的な技能が身に付いたか，思考力・判断力が高められたか，運動に取り組む際の態度がどのように身に付いたのか，ということが評価されなければならないと考えられる。なぜならば，それらの内容がスポーツライフを実現していくための基礎基本として位置づけられているのであり，その内容についての評価を行い，成果と課題が導かれなければ，学習指導要領にもとづく教科指導の評価とは言えず，学習指導要領の内容そのものの評価とはなり得ないと考えられるからである。

それにもかかわらず，体育科・保健体育科の指導に関わって取り上げられる子どもの現状や課題は，体力の低下の問題や運動をする子とそうでない子の二極化の問題ばかりである。そもそも体力は定期的・計画的な運動への取り組みを通して向上させていくものであり，１週間に２～３回程度の体育の授業によってその向上を担わせようとすることは少々荷が重すぎることはないだろうか。また，運動する子とそうでない子の二極化の問題も様々な環境要因によって発生していると言われているわけなので，体育の授業を通してその改善をめざすというのは，その一端を担うということでなければならない。「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現」に対して，時間的にも限られている体育の授業実践に与えられた役割は，そのための基礎を培うことなのである。

そこで本稿では，次期学習指導要領の実施に向けて，現行の体育科・保健体育科の学習指導要領に対して何が評価されなくてはならないのかについて検討しようとした。すなわち，現行の体育科・保健体育科学習指導要領のねらいを整理するとともに，整理した内容を視座に置き，その指導を受けてきた児童生徒がどのような運動種目を経験してきたのか，経験した運動種目に対する意識はどのようになっているのか，経験した種目を通して運動に対する意識はどのようになっているのか，その実態を把握しようとした。そして，それらの実態にもとづき，現行学習指導要領そのものに対する評価として何を知る必要があるのかを検討しようとした。

2．現行学習指導要領（体育科・保健体育科）の目標（構造）

学校体育期（小学校から高等学校までの教科体育の授業を受ける12年間）における体育科・保健体育科の学習指導要領（2008,2009）では，「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現」が目指されている。これは，子どもたちの現状と課題（子どもの心と体の状況）に対応し，その改善に取り組む際の方針にもとづいて打ち出されているものである。

現行の学習指導要領への移行に際して「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）平成20年１月17日」に体育科に関わる子どもたちの課題等が示されている。

○子どもの心身の発達については，社会環境や生活様式の変化が，様々な影響を与えている。体力・運動能力調査の結果など，子どもたちの体力水準が全体として低下していることがうかがえるとともに，積極的に運動する子どもとそうでない子どもに分散が拡大しているとの指摘がある。

○このように，子どもたちをめぐる環境の変化などを背景に，学習意欲と同様に，生活習慣や自分への自信，体力などについても，個人差が広がっているなどの課題がある。

上記のように，日常生活において運動遊び等による身体活動の機会の減少，精神的ストレスの増大などの児童生徒の生育環境の変化によって，活発に運動する者とそうでない者とに二極化しているという教科体育を巡る現状に対応するために方針が打ち出され，その方針に基づいて目標が検討され，学習指導要領の改訂に反映されているものと考えられる。

図１は，現行の小学校学習指導要領解説体育科（2008），中学校学習指導要領解説保健体育

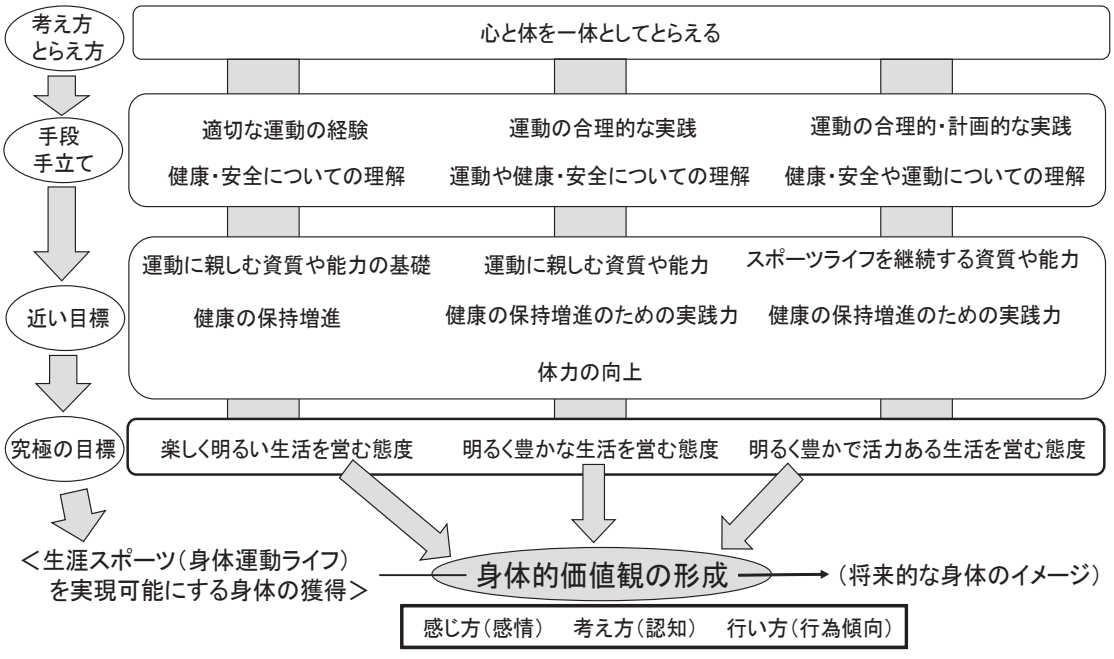


図１　現行体育科・保健体育科の学習指導要領の目標構造

編（2008），高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編（2009）に示されている目標を整理して示したものである。

これらを解釈すると，適切な運動の経験や運動の合理的・計画的な実践を手立てとして，運動に親しんだりスポーツライフを継続したりするための資質や能力を身につけていくことを積み重ねていき，結果として明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てていくこととなる，という構造となっていると考えられる。このような体育授業実践を通して，個々に応じた身体的価値観を形成していこうとするものであり，それが生涯スポーツを実現可能にする身体を獲得していくということとなろう。ここでいう身体的価値観とは，個々の子どもの自分と運動との関係性としての運動とのつきあい方，関わり方のことであり，それらを培っていくことが教科としての体育科・保健体育科のねらいと捉えられる。

ところが，現行の学習指導要領は，「生涯にわたって運動に親しむ」ためには，「それぞれの運動が有する魅力や特性に応じて（基礎的な）身体能力を身に付ける」ことが必要である，という論理が強調されてきたため，技能の面への意識が強く，運動の行い方や高め方を学ぶということについては不十分な部分があったと思われる。「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現」は，運動やスポーツが「できる」「できない」という価値観で決定されてしまうのではなく，自らの身体能力に応じた身体的価値観の形成とそのために必要な身体イメージの獲得の必要が考えられるのである。

３．現行学習指導要領にもとづく体育科・保健体育科の教科指導を受けてきた学生の意識

学校体育期は小学校から高等学校までの12年間である。そのため，現在大学に在学中の大学生は，現行の学習指導要領にもとづく教科指導を受けてきた児童・生徒たちである。特に，大学１年生は，前年度まで学校体育の授業を受けてきている。そこで，高等学校までに受けてきた体育の授業実践を通して，それらの学生たちが経験してきた運動種目についてどのような意識を持っているのかを把握しようとした。

以下のような手続きで，質問紙調査を実施し処理を行った。

＜調査対象＞

S大学における全学教育科目「健康体育」を受講する学生のうち６クラスを抽出し，そのクラスの受講生計224名を対象とした。

＜調査時期＞

平成29年７月上旬～８月上旬

＜調査内容＞

・小学校，中学校，高等学校の体育授業で経験した種目
・小学校，中学校，高等学校の体育授業で好きだった種目とその理由
・小学校，中学校，高等学校の体育授業で嫌いだった種目とその理由

＜調査方法＞

質問紙を作成し，WEB上で回答を入力させデータの収集を行った。

＜処理方法＞

単純集計を行い，その結果について考察を加えた。

（1）体育授業実践における種目経験の意識

図２・３・４はそれぞれ，小学校・中学校・高等学校の体育授業で経験した種目について回答させた結果を示したものである。回答する種目として示したのは，現行の体育科・保健体育科の学習指導要領に示されている種目である。

小学校体育授業で経験した種目の回答を見てみると，一通りの種目を経験してきたという意識が見られた。なわとび，跳び箱運動，クロール，短距離走，鉄棒運動，持久走については90％を越えているが，共通していることはどれも個人種目ということであった。80％を越えるところまで幅を広げると，サッカーやバスケットボールなどが続くようになり，各領域の運動が体育授業の中で確実に位置づけられていることを示しているものと考えられた。また，同じ領域内における複数種目が見られることから，多様な種目についての運動経験がなされていることも示していると考えられた。しかしながら，表現運動については，経験した意識として50％を下回っており，実施率という点に対する課題が表されている結果と考えられた。また，タグラグビーやフラッグフットボールのようなニュースポーツ系は，新しく取り入れられた段階で小学校の体育の授業を受けていた学生が調査対象となっていることで，まだ，実施率としては低かったという状況であったことの影響が考えられた。

中学校体育授業で経験した種目の回答を見てみると，90％を超える種目は，短距離走･リレーのみという結果であった。80％を越える種目を含めると，バスケットボール，マット運動，サッカー，長距離走，クロール，バレーボールとなっており，団体種目としての球技種目が位置づいているという特徴が見られた。これは，小学校体育授業で経験した種目の意識とは対照的であった。また，種目経験の意識から各領域が網羅されていることがうかがえるが，各領域の中で各１種目が重点的に取り扱われている可能性が考えられる結果であった。その中においても球技については複数の種目がそれぞれ重点的に取り扱われていることがうかがわれる結果であった。

高等学校体育授業で経験した種目の回答を見てみると，バレーボールとバスケットボールが，80％を超えていた。続いて，短距離走・リレー，卓球，サッカー，バドミントンが高い割合を示していた。この結果から，高等学校では，球技について複数種目を重点的に取り扱っている傾向にあると考えられた。その他の領域については，その学校によって扱う種目の違いがあり，経験した種目の意識が分散されている傾向が見られた。

現行学習指導要領では，小学校１～４年，小学校５～６年・中学校１～２年，中学校３年～高等学校３年の４・４・４で区切ることで，その発達の段階のまとまりを示している。それぞ

表１　学校体育期12年間における発達段階のまとまりとねらい

学年の区切り	ねらい
小学校１～４年	各種の運動の基礎を培う （運動を好きにさせる）
小学校５・６年 中学校１・２年	多様な運動種目を経験する （特性に触れ楽しさを味わう）
中学校３年 高等学校１～３年	運動を選択し，学び方を深める （得意な運動を獲得する）

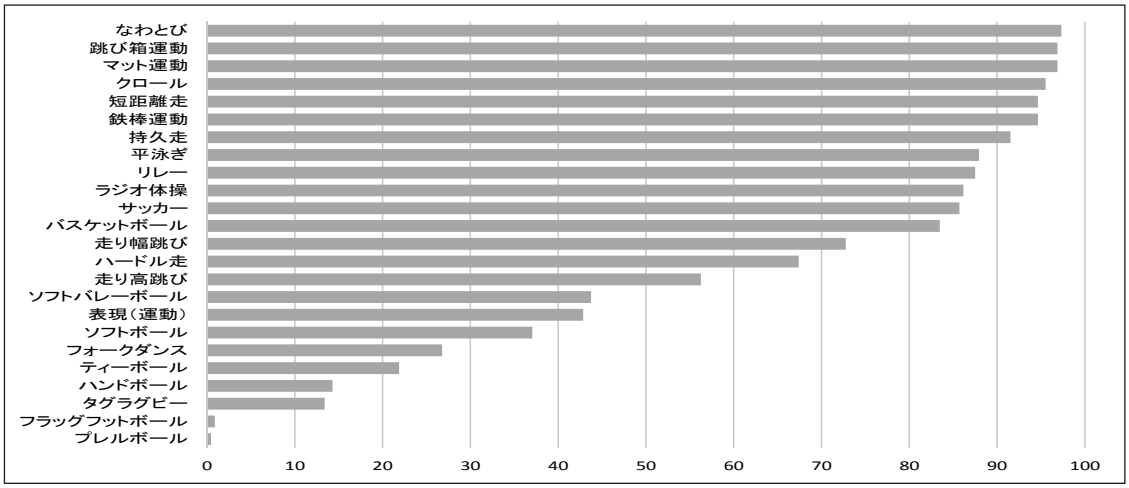


図２　小学校体育授業で経験した種目（%）

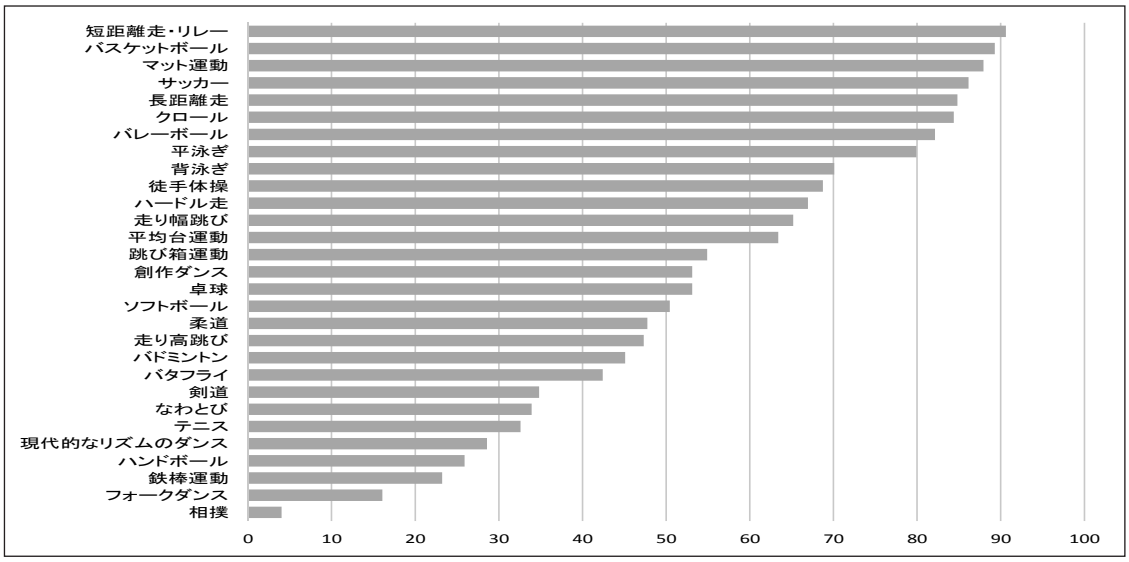


図３　中学校体育授業で経験した種目（%）

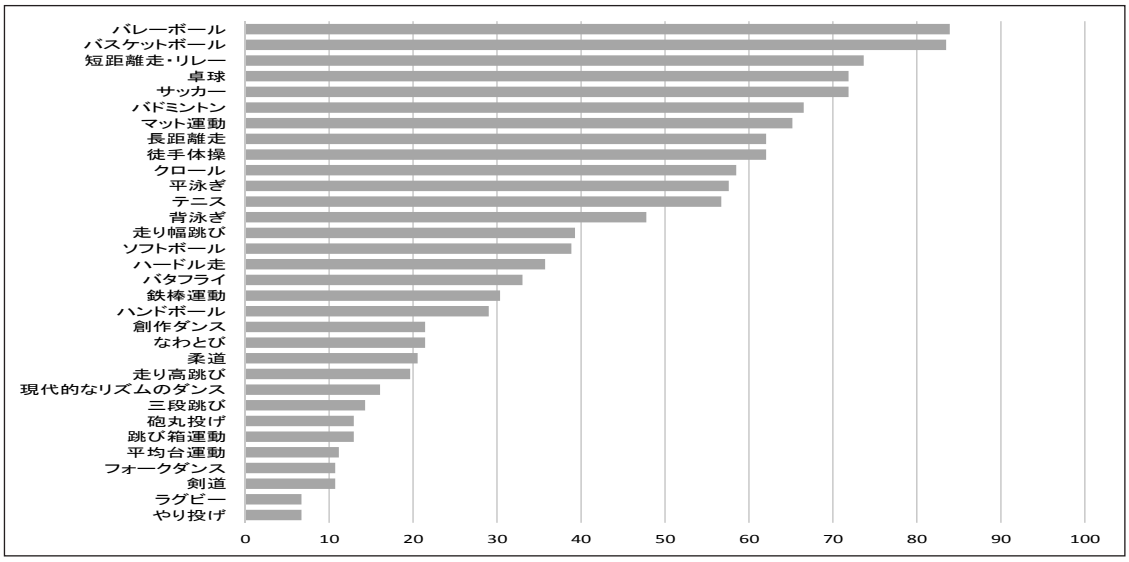


図４　高等学校体育授業で経験した種目（%）

れの段階のねらいは表１に示す通りである。種目経験意識の結果をこれらのねらいに対応させてみようとした。小学校段階において各領域において多くの種目を経験しているという意識が見られることから，各種の運動の基礎を培うということに対して，各種の運動には十分触れていると考えられた。小学校高学年から中学校にかけての多様な運動種目を経験するというねらいに対して，多様な運動種目の経験は十分であると考えられた。また，各領域において，１つの種目に重点が置かれている状況は，その種目を領域の中核として位置づけた単元の実践を通して，特性に触れさせようとしている可能性が考えられた。しかしながら，中学校３年～高等学校３年においては，運動を選択し，学び方を深めるというねらいになってはいるものの，高等学校の体育授業実践において，生徒が種目を選択していくような仕組みではなく，それぞれの高等学校において決められた種目を取り扱って授業を行っているものと考えられる。そのため，このことは種目の取り扱いについての課題として捉えておく必要が考えられた。

（２）体育授業実践を通しての種目への好嫌意識

児童・生徒は，体育授業実践で運動を経験していくことを通して種目に対する好き嫌いの意識を持つようになる。図５は，小学校体育授業で好きだった種目と嫌いだった種目の回答をまとめたものである。

好きだった種目では，なわとびが高い割合を示していた。続いて，サッカー，平泳ぎ，クロー

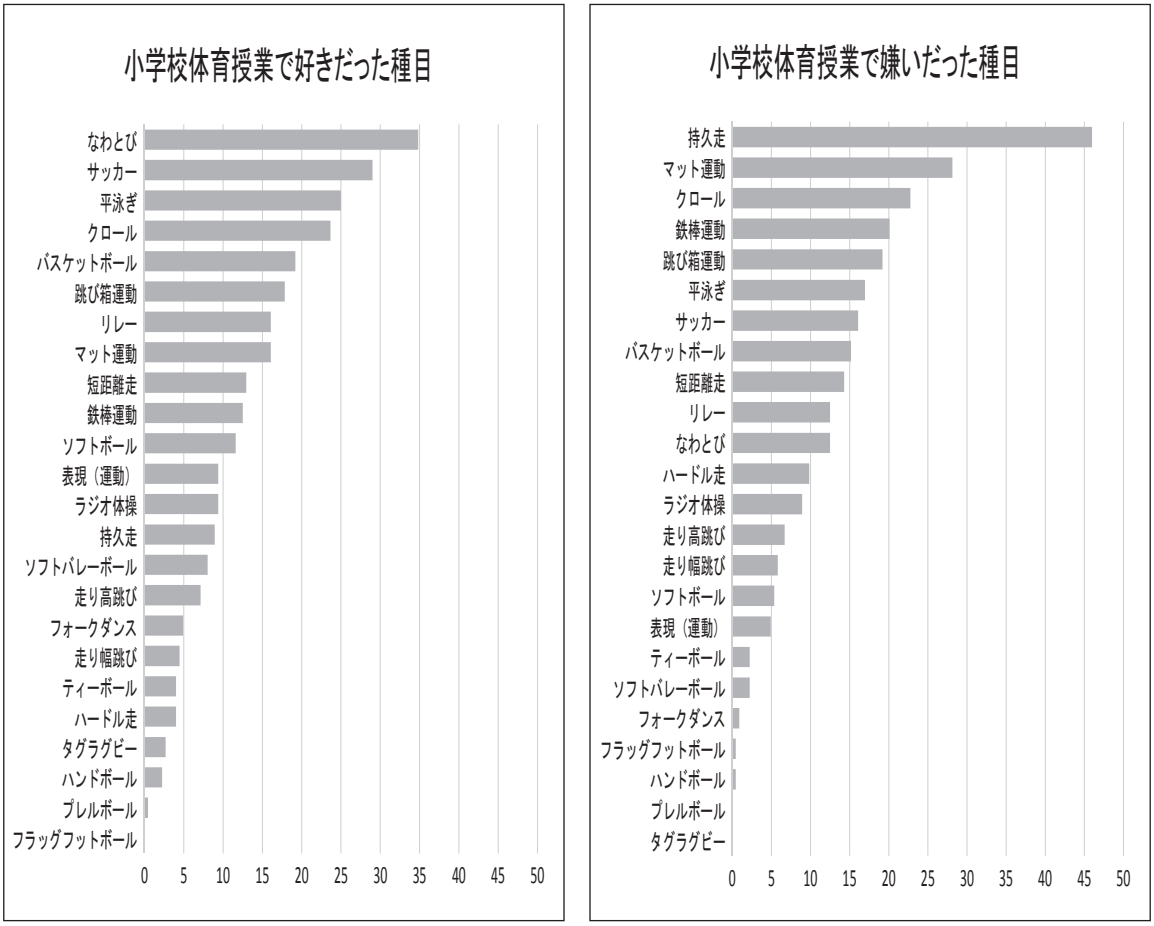


図５　小学校体育授業で好きだった種目と嫌いだった種目（%）

ル，バスケットボールであった。領域として見ると水泳とボール運動について好きという意識が多くあることになる。それに対して，嫌いだった種目は群を抜いて持久走であった。これは，ただ走るだけでしんどいなどの種目の特性に関する要因が予想される。続いて，マット運動，鉄棒運動，跳び箱運動が続くが，どれも個人種目であり，できるできないがはっきりするところなどが嫌いという意識へ影響していると考えられた。水泳については，好きだった種目，嫌いだった種目ともに高い割合を示していることから，好き嫌いがはっきり分かれる種目と考えられる。

図６は，中学校体育授業で好きだった種目と嫌いだった種目の回答をまとめたものである。

好きだった種目では，バドミントンとバレーボールのネット型の球技種目が多かった。続いて，平泳ぎ，クロールの水泳であり，さらに，サッカー，卓球，バスケットボール，ソフトボールというように球技種目が好まれていた。それに対して嫌いだった種目では，長距離走とマット運動の割合が多く見られた。長距離走については，小学校での意識と同様に種目の特性に関する要因が考えられる。マット運動についても，個人種目であり，できるできないがはっきり見えるところにその理由があり小学校の意識から継続されていると考えられる。小学校では嫌

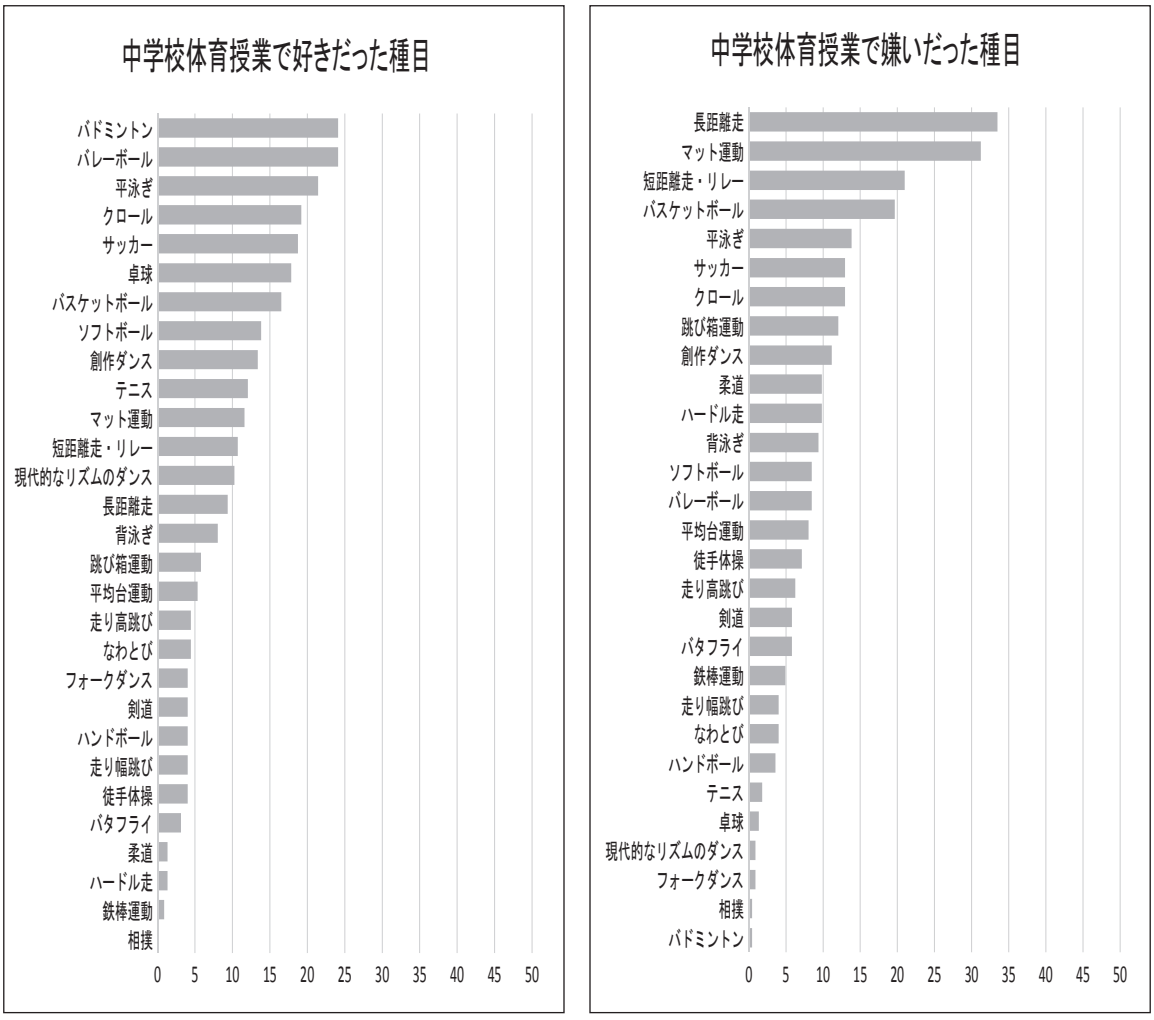


図６　中学校体育授業で好きだった種目と嫌いだった種目（%）

いだった種目は個人種目が多く見られ，球技系の種目はあまり嫌いとなっていなかったが，中学校においては，バスケットボールが上位に入ってきている。これは，技能の差が顕著に表れ，そのことに対する意識を強く持ち始める年代であることの影響が考えられた。

図７は，高等学校体育授業で好きだった種目と嫌いだった種目の回答をまとめたものである。

好きだった種目の上位には，バドミントン，卓球，バレーボール，テニス，バスケットボール，サッカーが並んでいた。しかしながら，高等学校体育授業においては，各学校で扱っている運動種目が限定されており，その中でも比較的球技の領域の種目は重点的に取り扱われていることの影響が考えられる。それに対して，嫌いだった種目では，長距離走は，小学校，中学校と同様に高い割合を示していた。続いて，短距離走，マット運動が並び，これは，個人種目としてできるできないがはっきり見えることの影響が考えられ，小学校，中学校から連続していることがうかがわれた。続いて，バスケットボール，サッカーが示されているが，好きだった種目と嫌いだった種目という比較からすると，うまくできる生徒は好きで，苦手な生徒は嫌いというような二極化をうかがうことができる。

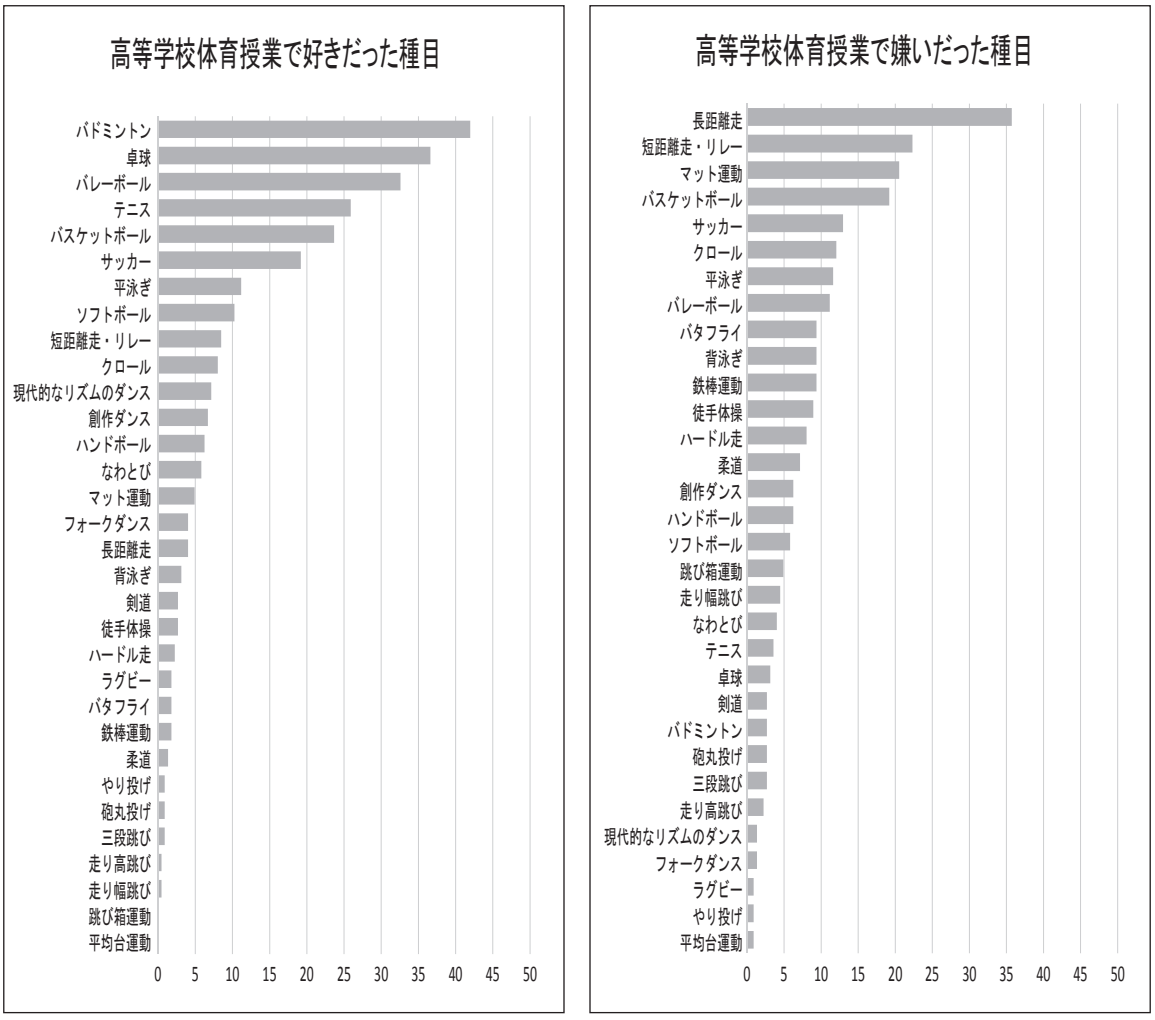


図７　高等学校体育授業で好きだった種目と嫌いだった種目（%）

（3）体育授業において好きだった種目の理由と嫌いだった種目の理由

図８は，小学校体育授業で好きだった種目の理由についての回答をまとめたものである。

「その運動をしてとても気持ちがよかったから」という理由が70％を超えてもっとも多く，次いで「みんなで楽しく運動することができたから」「せいいっぱい運動することができたから」が多かった。この結果からは，運動をすることの楽しさや運動することで得られる気分のようなものが重要な意識として捉えられていると考えられる。次いで「その運動が上手にできるようになったから」という理由があげられており，技能面としてできるようになるという意識が小学生段階の体育授業においても生み出されているということがうかがわれる結果であった。

図９は，小学校体育授業で嫌いだった種目の理由についての回答をまとめたものである。

「その運動が上手にできなかったから」という理由がもっとも多く，できる・できないということが，運動に取り組む際の意識として強くもたれていることが見られた。やはり，その運動が嫌いになるという要因として技能面の関わりが大きいものと考えられる。次いで「その運動をしても気持ちよくなかったから」という理由が多く，小学校の体育授業では，運動することそのもののよさと技能面がそれぞれの運動種目に対する意識を作り上げていく可能性が考えられた。

図10は，中学校体育授業で好きだった種目の理由についての回答をまとめたものである。

「その運動をして，とても気持ちがよかったから」と「みんなで楽しく運動することができたから」がもっとも多い理由としてあげられており，運動をすること自体から得られる感じが重要な視点になっていると考えられる。みんなで楽しく運動することができたから，ということからは，仲間との関わりに関する部分の重要性も感じられた。それらに次いで，「その運動が上手にできるようになったから」という理由があげられており，その運動を好きになる要因として，小学校と同様に技能面に対しての意識は影響が大きいと考えられる。

図11は，中学校体育授業で嫌いだった種目の理由についての回答をまとめたものである。

「その運動が上手にできなかったから」と「その運動をしても気持ちよくなかったから」という理由がかなりの割合を占めていた。その運動を嫌いになる理由としては，やはり技能面への意識が大きく影響していることが分かる。

図12は，高等学校体育授業で好きだった種目の理由についての回答をまとめたものである。

「みんなで楽しく運動することができたから」という理由がもっとも多く，次いで「その運動をしてとても気持ちよかったから」という結果であった。このことは，小学校，中学校の結果と同様であり，体育の授業を行う際の雰囲気や運動をすることで得られる爽快感のようなものが重要な意識の視点になっている可能性が考えられた。そのような意識があるものの，やはり，「その運動ができるようになったから」という理由があげられており，技能面としてできることがその種目を好きになる大きな要因になっている。

図13は，高等学校体育授業で嫌いだった種目理由についての回答をまとめたものである。

「その運動が上手にできなかったから」という理由がもっとも多く，技能面としてできないことは，小学校・中学校・高等学校を通じて，その運動を嫌いにさせる大きな要因となっている。

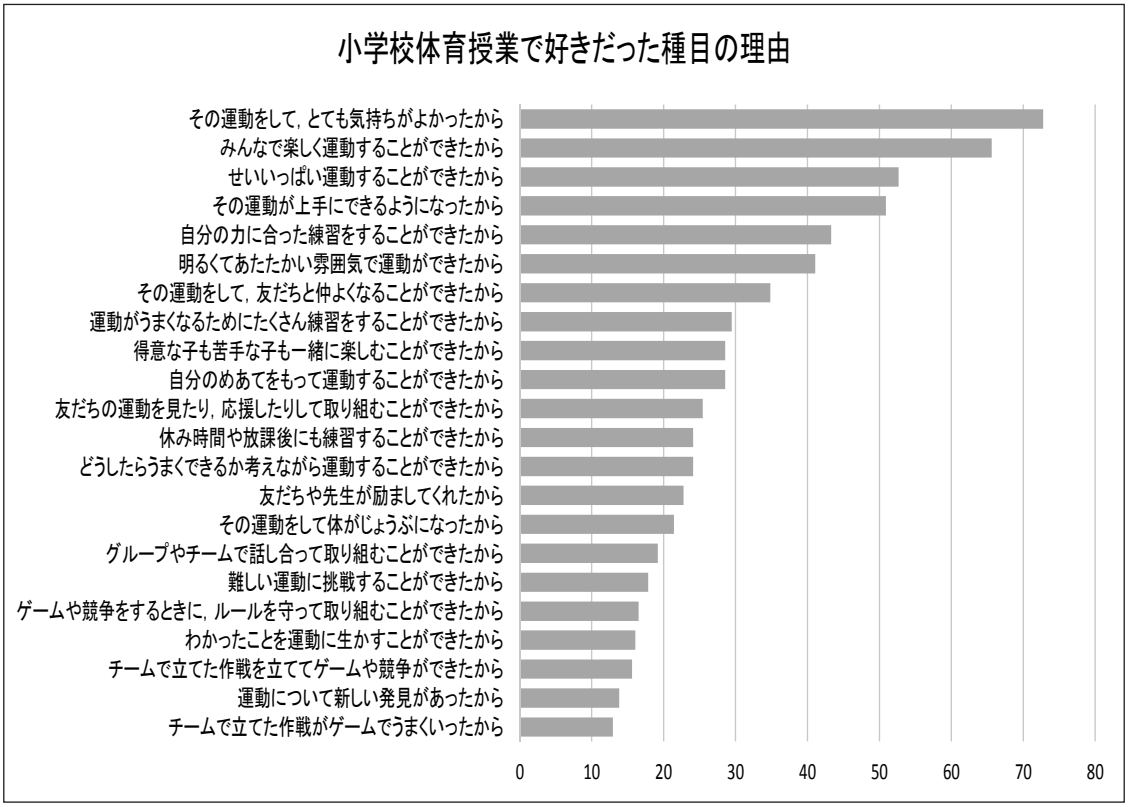


図８　小学校体育授業で好きだった種目の理由（%）

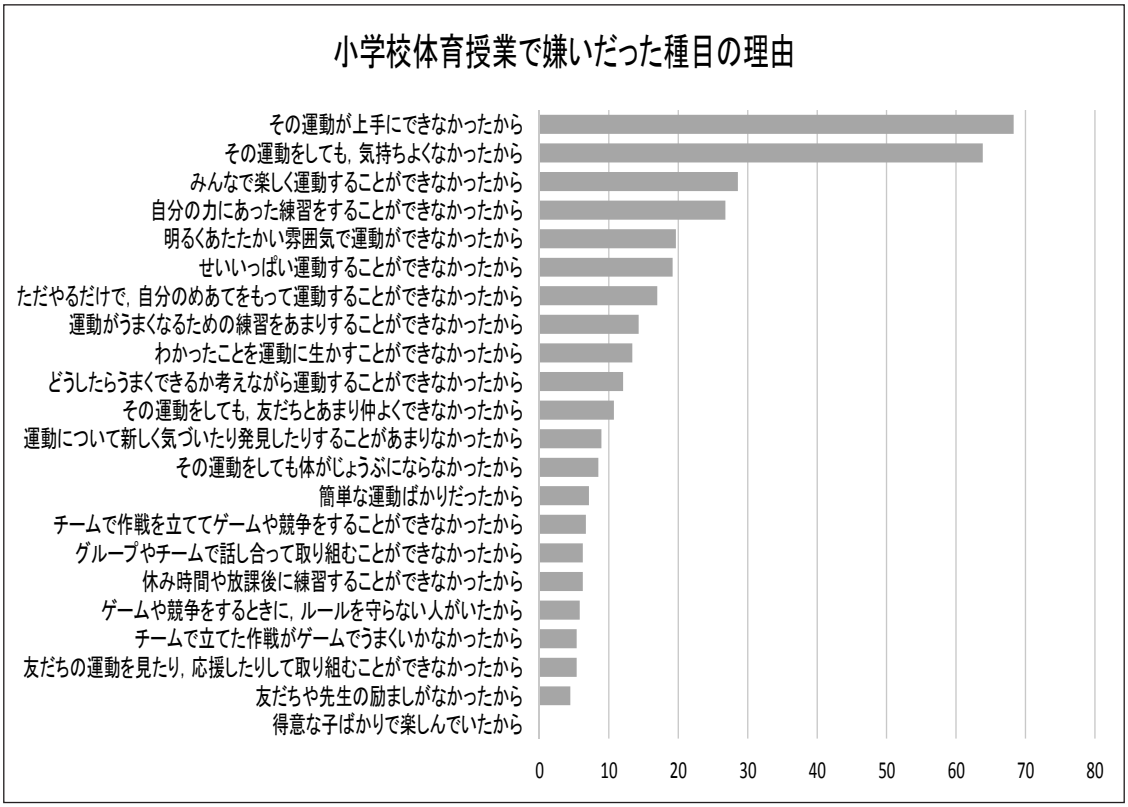


図９　小学校体育授業で嫌いだった種目の理由（%）

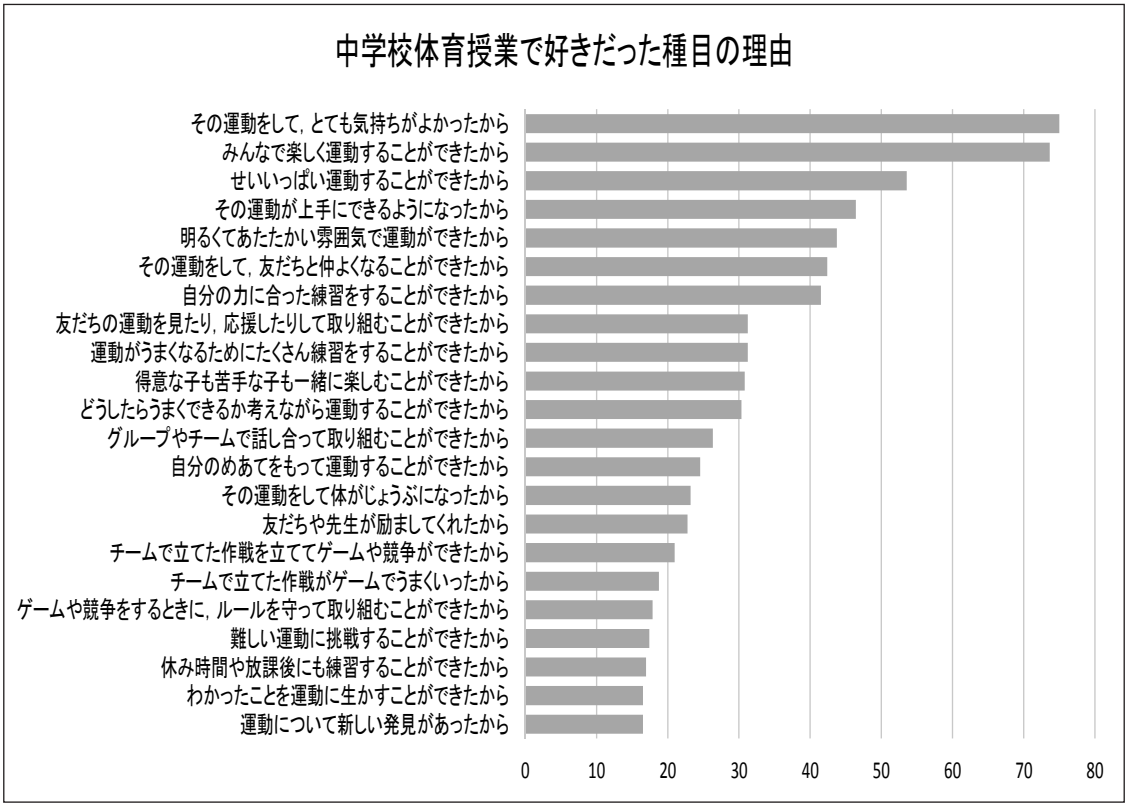


図10　中学校体育授業で好きだった種目の理由（%）

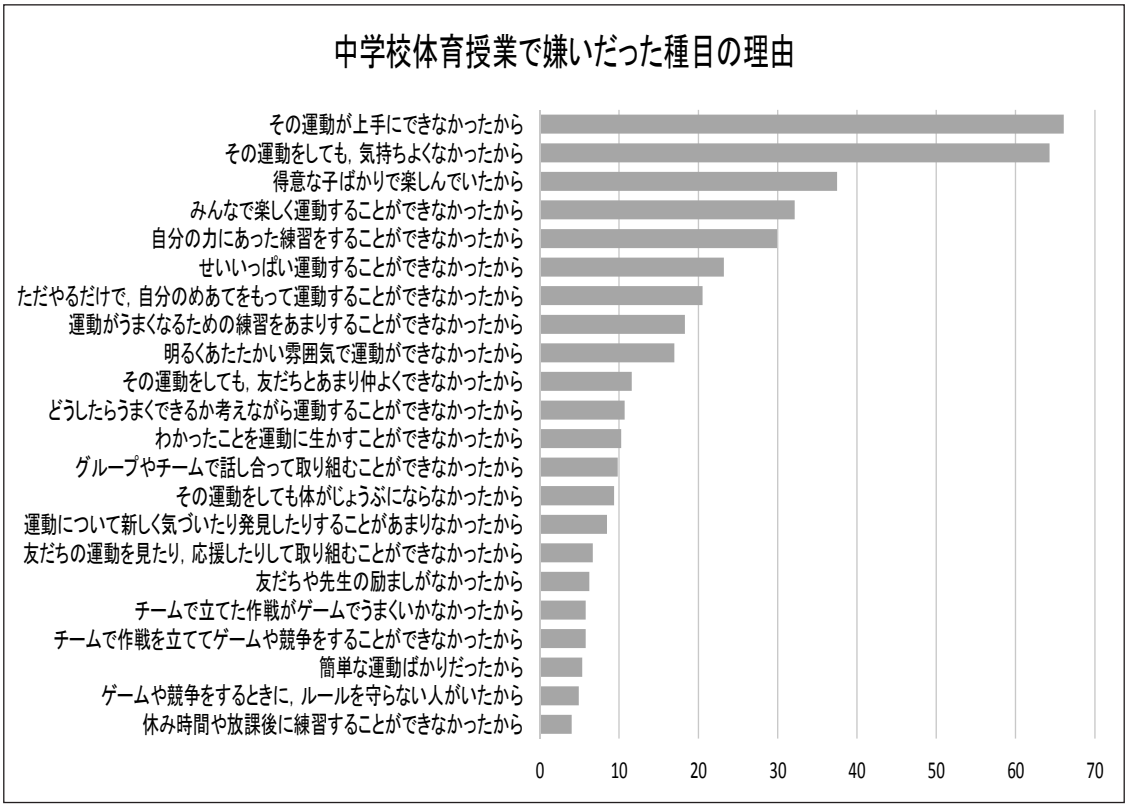


図11　中学校体育授業で嫌いだった種目の理由（%）

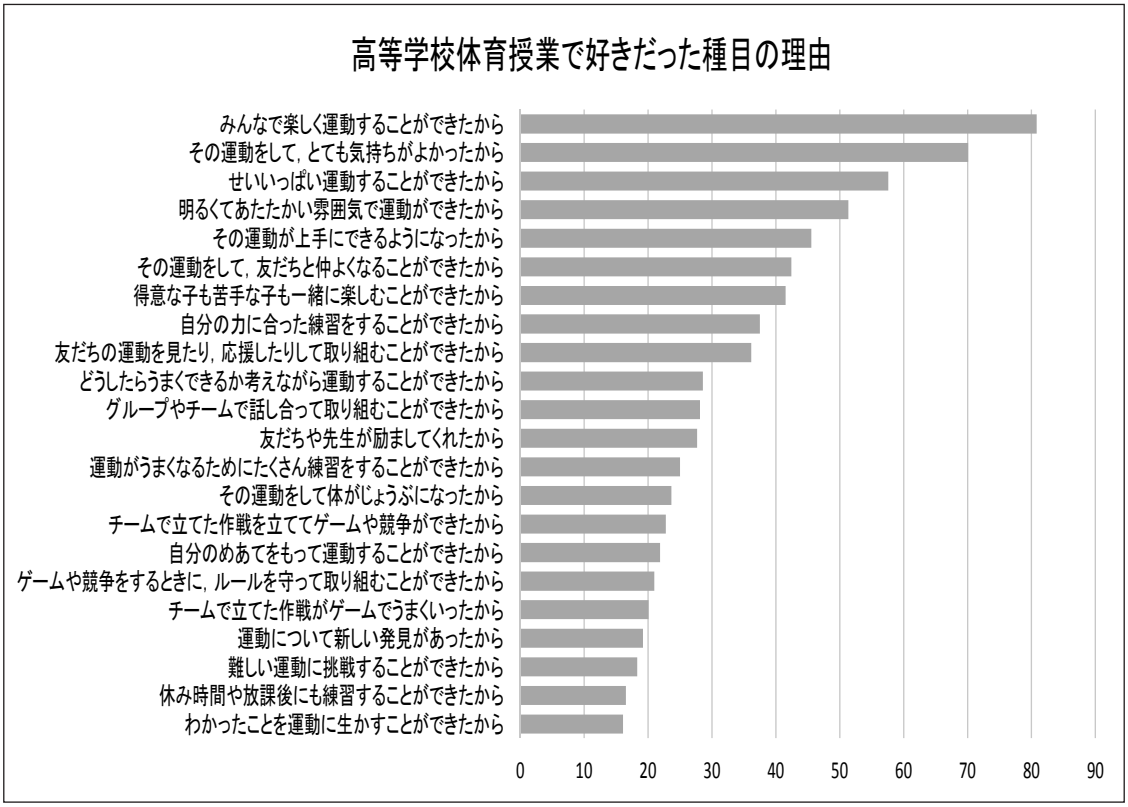


図12　高等学校体育授業で好きだった種目の理由（%）

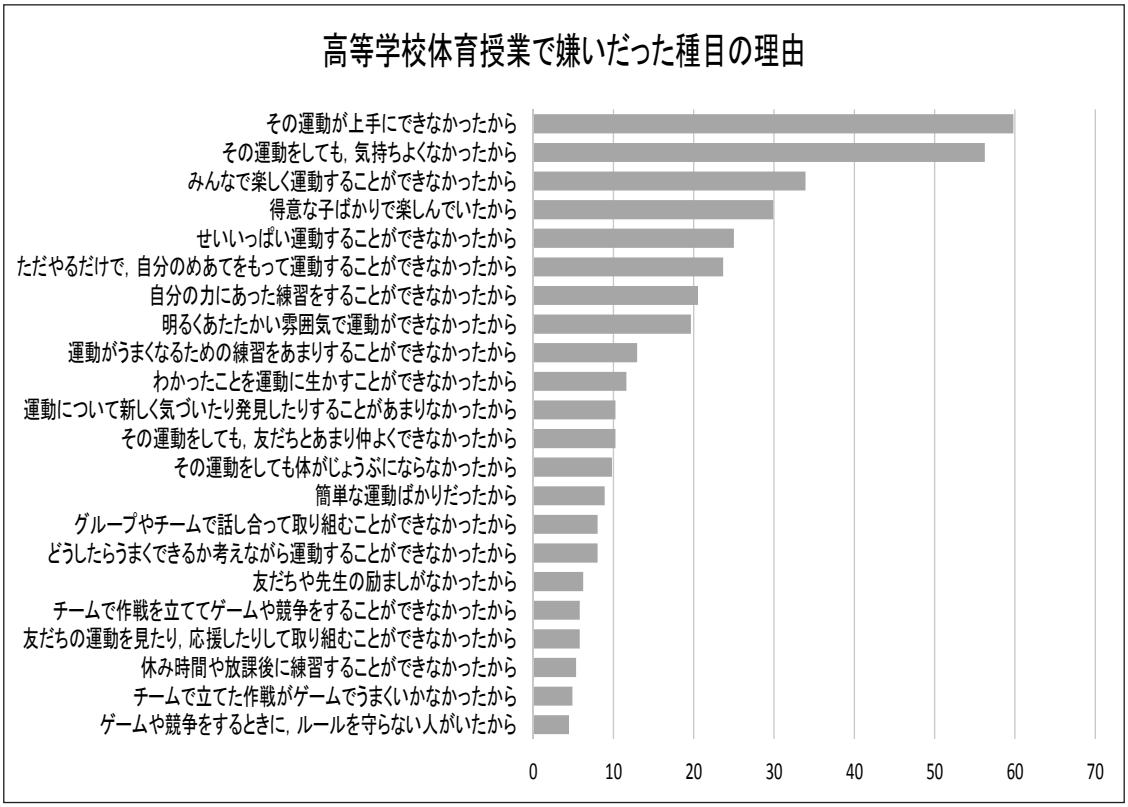


図13　高等学校体育授業で嫌いだった種目の理由（%）

大学生への質問紙調査によって，学校体育の授業実践を通して子どもたちの運動種目への意識がどのようになっているのか，その実態を整理してきた。

授業実践において経験してきたことを通して，種目に対する好き嫌いの意識，好きだった理由や嫌いだった理由についての意識等が培われているが，なぜ，そのような意識の実態になっているのか，その要因をひとつひとつ紐解いていくことが，学習指導要領にもとづく教科指導の評価をしていくことになると考えられる。

そして，子どもたちが，運動に取り組むことに対してどのような価値観を身に付け，運動との関係性をどのように構築しているのか，ということが検討されなければならないと考えられる。そのようになってはじめて，学習指導要領の内容がどうであったのかの評価となり，その成果として，運動する子とそうでない子の二極化の改善や体力の向上等の問題にどのように影響があったのかということが追究されることが必要である。

４．学習指導要領の改訂に向けての成果と課題の問題点

平成28年12月21日に教育審議会における「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」が示されている。「現行学習指導要領の成果と課題を踏まえた体育科，保健体育科の目標の在り方」としての現行学習指導要領の成果と課題は以下のようにである。

＜成果＞

○その中で，運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと，体力の低下傾向に歯止めがかかったこと，「する，みる，支える」のスポーツとの多様な関わりの必要性や公正，責任，健康・安全等，態度の内容が身に付いていること，子供たちの健康の大切さへの認識や健康・安全に関する基礎的な内容が身に付いていることなど，一定の成果が見られる。

運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったことについては，スポーツ庁の「全国体力・運動能力，運動習慣等調査」がひとつの根拠となっている。

「運動やスポーツをすることは好きですか」という質問への「好き」の回答の割合は，平成24年度の調査結果は，小学校（第５学年）男子72.7％，同女子53.6％，中学校（第２学年）男子62.6％，同女子43.5％，平成27年度調査結果は，小学校（第５学年）男子73.0％，同女子56.8％，中学校（第２学年）男子63.2％，同女子46.8％となっている。

体力の低下傾向に歯止めがかかったことの根拠としては，文部科学省の「文部科学省白書」が根拠として示されている。

文部科学省の「平成27年度　文部科学省白書」では，子供の体力の現状と課題について，新体力テストとなって以降の直近の17年間の合計点の推移を見てみると，ほとんどの年代で緩やかな向上傾向となっており，平成26年度の結果は多くの年代で過去最高を記録しているとされている。

＜課題＞

○他方で，習得した知識や技能を活用して課題解決することや，学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること，運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること，子供の体力について，低下傾向には歯止めがかかっているものの，体力水準が高かった昭和60年ごろと比較すると，依然として低い状況が見られることなどの指摘がある。

子どもの体力水準についても「文部科学省白書」が根拠として示されている。

文部科学省の「平成27年度　文部科学省白書」では，子供の体力の現状と課題について，長期的に見ると，体力水準が高かった昭和60年頃との比較では，握力及び走，跳，投能力に係る項目は，以前低い水準となっている（中学校男子の50m走及びハンドボール投げ並びに高校男子の50m走を除く）とされている。

教科体育の目標は，「生涯にわたって運動・スポーツに親しむための基礎を育成すること」となっている。その基礎を培うものとして，基本的な技能を身に付けたり，思考・判断等の能力を見につけたり，運動に取り組む際の態度を身に付けたりしていくことが目指されているものである。そのようなことからすれば，子どもの現状や課題が示されたとしても，学習指導要領の内容がどうだったのかということとは関連づけることが難しいと考えられる。

つまり，「現行学習指導要領の成果と課題を踏まえた体育科，保健体育科の目標の在り方」の中で示された子どもの現状や課題を，現行学習指導要領の内容に関する成果と課題というように捉えようとした際，学習指導要領の内容についての適正な評価になっているとは考えにくい。本来，そういった課題の解決の一端を担うために，学習指導要領にもとづいた教科体育の指導では何ができるのかを考えようとしているのであるから，体力や運動をする子とそうでない子の二極化がどうとかいうような問題が提示されたとしても，新しい学習指導要領の内容に関する根拠となるかと言われれば，疑問であると言わざるを得ないであろう。

６．まとめ

本稿では，現行の体育科・保健体育科の学習指導要領の目標を整理することから，その目標構造を視座に置き，学校体育期に経験してきた種目を確かめ，好きだった種目とその理由，嫌いだった種目とその理由について考察してきた。その結果，各種の種目の経験の実態，それらの種目に対する好き嫌いの意識の実態，好きだった理由や嫌いだった理由の実態が捉えられた。しかしながら，そのような意識の背景をさぐっていくことから，子どもたちが，運動に取り組むことに対してどのような価値観を身に付け，運動との関係性をどのように構築しているのか，ということが検討されなければならないと考えられた。そのようにすることではじめて学習指導要領の内容がどうであったのかの評価となり，その成果として，運動する子とそうでない子の二極化や体力の向上等の問題解決にどのように影響があったのかということが追究されることが必要であると考えられる。そうしていかなければ，現行の学習指導要領の内容に関する評価があいまいなまま次期学習指導要領の内容が示されていくこととなる。そうなれば，新しい学習指導要領で提示された内容は，現行の学習指導要領にもとづく教科指導において，どのよ

うに位置づけられていたのか，その成果や課題の検討がないまま授業実践に取り組んでいくことになると考えられ，同じ課題が這いずり回ることになってしまうことが危惧される。これらのことから，体育科・保健体育科における次期学習指導要領に移行するにあたって，体力の問題や，運動する子とそうでない子の二極化の問題を取り上げながらも，その問題解決の一端を担う教科体育としての役割は何なのかを再認識し，その役割を果たせているのかどうかを評価していくことの必要性が考えられた。

文　献

・中央教育審議会（2008）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）」平成20年１月17日
・文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説　体育編，東洋館出版社
・文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説　保健体育編，東山書房
・文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説　保健体育編・体育編，東山書房
・中央教育審議会（2016）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）」平成28年12月21日